

[成果情報名] 垣根用緑化植物の適切な挿し木および実生による繁殖法

[要約] ミスト繁殖におけるヒメシャリンバイ、カラタネオガタマ、グミ「ギルドエッジ」、ベニバナトキワマンサク等の挿し木繁殖は、秋季以外の時期が適する。また、シャリンバイ、ハマヒサカキ等は、採種直後に果肉を除去した取り播きが適する。

[キーワード] 垣根、緑化植物、ミスト、挿し木、実生、果肉、取り播き

[担当] 三重科技セ・農業研究部・園芸グループ

[連絡先] 電話 0598-42-6358、電子メール kamatm00@pref.mie.jp

[区分] 関東東海北陸農業・花き

[分類] 技術・参考

[背景・ねらい]

近年、緑化植物は利用場面の多様化から、多くの種類を使用する消費ニーズが高まり、県内緑化植物生産においても、多様な樹種生産への模索が始まっている。また、栽培においてもミスト条件下の増殖法が導入されつつある。そこで、垣根向けに注目される消費ニーズの高い斑入り品種等の樹種について無加温ミスト繁殖室における挿し木適期を、種子確保が容易な樹種については、実生による有効な繁殖法を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. リガストラム「ビカリー」は11～4月が、ヒメシャリンバイは7、11～3月と挿し木適期の幅が広い（図1）。
2. ハマヒサカキは5、8月が、トキワマンサクは7月が、ベニバナトキワマンサクは5、7月が挿し木適期である（図1）。
3. カラタネオガタマは4、12月、グミ「ギルドエッジ」は5、2月が挿し木適期であるが発根評点は低い（図1）。
4. トウネズミモチ「トリカラー」は、挿し木が困難である（図1）。
5. 実生による省力、効率的な繁殖法は、シャリンバイやハマヒサカキは果肉を除去後に取り播き、ネズミモチは無処理で取り播きが適する（図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 実生法については、種子を乾燥させないようにする。
2. セル成型トレイを用いた場合、容器内が過湿となりやすいので、無加温温室でのミスト繁殖は、通気透水性、保水性が良い用土を利用して行う。

[具体的データ]

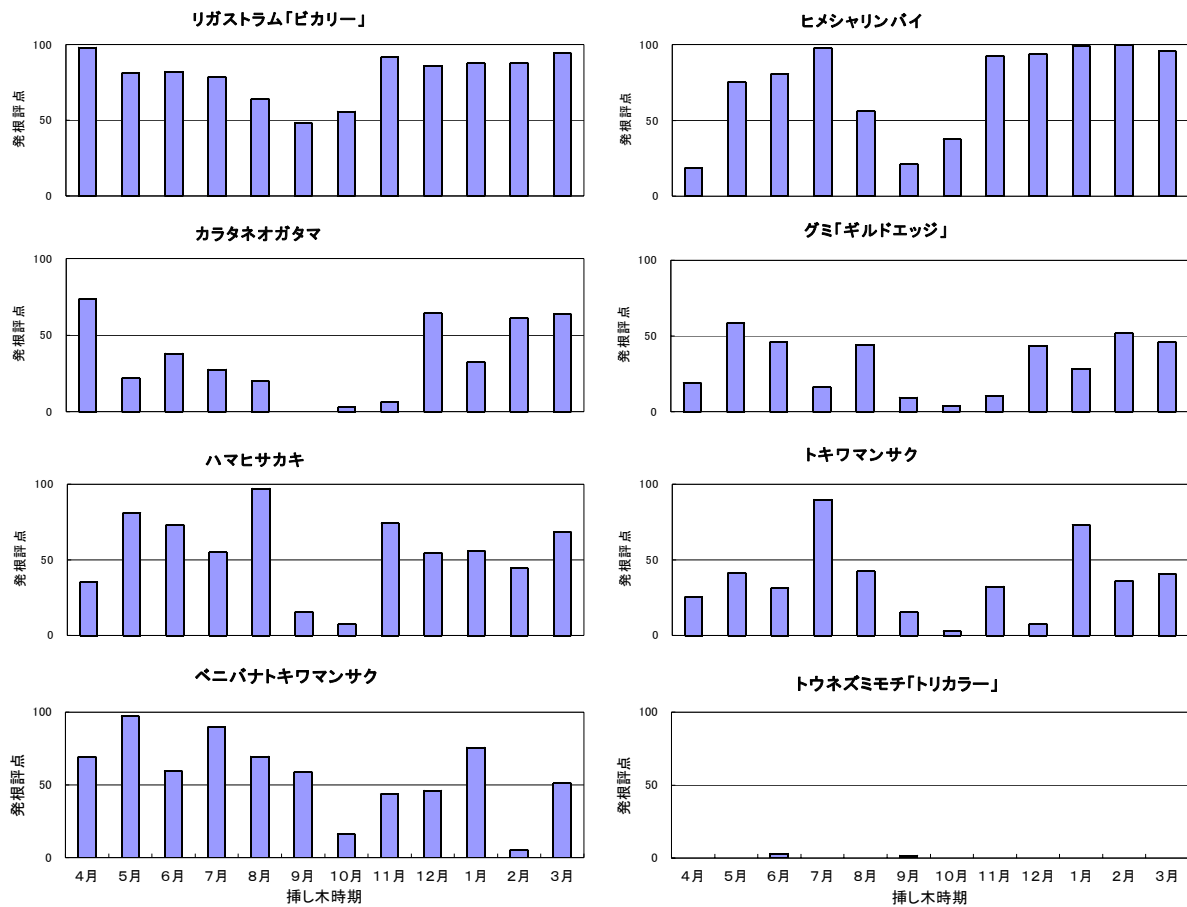


図1. 主要樹種の挿し木時期と発根評点

発根評点: 発根程度を「0」(未発根)、「1」(発根量:少)、「2」(発根量:中)、「3」(発根量:多)の4段階に区分し、個体数を、「a」、「b」、「c」、「d」として、以下の算式により求めた。

$$\text{発根評点} = (a \times 0 + b \times 30 + c \times 70 + d \times 100) \div (a + b + c + d)$$

 挿し木環境: 無加温温室ミスト条件 挿し木容器: セル成型128穴規格(32本/区)
 用土: 山砂:ピートモス:川砂=2:2:1 挿し穂:3節に調整した。
 調査時期:挿し木7か月後に分解・調査した。

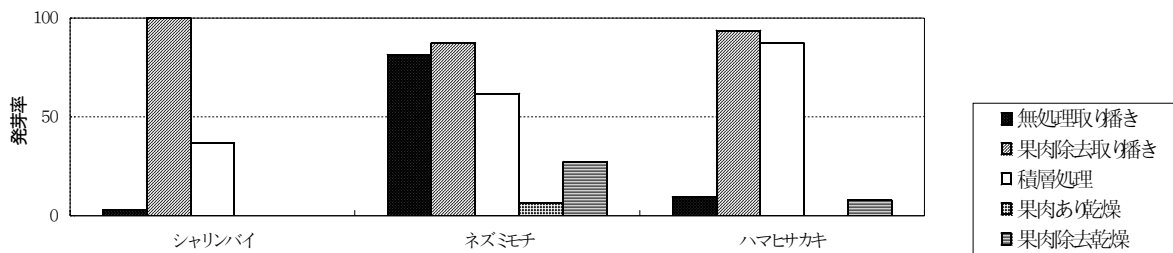


図2. 垣根に向く主要樹種の播種120日後における発芽率

発芽率: 播種後120日後調査(取り播き:12月19日、積層処理及び乾燥貯蔵は3月15日)
 環境: 無加温温室
 播種容器: セル成型128穴規格(64粒/区) 用土: 山砂:ピートモス:パーライト:川砂=5:2:2:1
 取り播き: 採取後直ちに播種(無処理:果肉を除去せずに播種 果肉除去:果肉除去後播種)
 積層処理: 12月19日採取後砂に埋め湿潤状態で管理し、果肉除去後3月15日播種
 乾燥貯蔵: 12月19日採取後種子を乾燥条件で管理し、3月15日に播種

[その他]

研究課題名: 緑化植物の根域制限による効率的な増殖法の開発
 予算区分: 県単
 研究期間: 2002-2003年度
 研究担当者: 千田泰義、鎌田正行、西田悦造、内山達也